

沖縄方面学習（修学）旅行と総合学習の取り組み

個人テーマ学習と成果の共有

Combining School Excursion to Okinawa with Period of Integrated Study
Personal Thematic Project and Sharing of Personal Achievements

佐久間 俊輔 藤野 敦 若宮 知佐

<キーワード> 修学旅行 学習旅行 総合的学習の時間 沖縄 フィールドワーク 石垣島 宮古島

はじめに

2006年11月13日～17日、本校2学年（52期生）は沖縄方面（宮古島・石垣島を含む）をフィールドとする学習旅行を実施した。

本校学習旅行（修学旅行）は、現地における生徒のフィールドワークを活動の軸として、これまで三十年余に渡る蓄積がある。永きにわたり京都・奈良を中心とした関西地域での実践が続けられてきたが、2000年より、当該学年の設定によるフィールドの拡大がはじまり、2004年にはタイ国での学習旅行、2005年には韓国・沖縄・関西三方面より選択型の学習旅行など、様々な試みがおこなわれ来た。

また、新教育課程の実施に伴う「総合的な学習の時間」の導入とともに、学習旅行におけるフィールドワークの充実を目的とした事前・事後の様々な学習・活動が試行されてきた。

本稿では、本校52期生を対象とした2006年11月実施の学習旅行を中心に、対象学年入学時からのおよそ2年間にわたる「総合的な学習の時間」を利用した事前準備・事後成果総括を以下の項目に従って記述を進めたい。

1. 学習活動の視点
2. 2年間の実践概要
3. 総合的な学習の時間を利用した講座設定
4. 事前事後学習における情報機器の利用
5. 生徒アンケート結果より
6. 終わりに

1. 学習活動の視点

今回の学習旅行に関する活動は、以下の学習視点を中心に整理することができる。

①個人・グループ・学年全体の有機的な学習

- a：学年全体の共有知識の底上げ
- b：個人の学習テーマの深化
- c：個人テーマとグループ行動の有機的関連

aの「学年全体の共有知識の底上げ」を目指した活動は、沖縄というフィールドに関する基礎的な知識の底上げ、共有すべき基礎的な知識の確認作業である。これらは生徒個々が自らの興味関心を広げることを目的とするため、個人の追求テーマを設定する以前におこなうことが効果的である。具体的には教員・生徒の実行委員会などが設定した8つのテーマのうちどれかを機械的に全員がグループでレポートをしあうという活動になる。

bの「個人の学習テーマの深化」を目指した活動は、現地での活動をより意義のあるものにするために、事前に生徒個々の問題意識、視点をどのようにより高く作り上げていくかという目標が掲げられる。学習旅行ではフィールドワークにおける学習動機（モチベーション）を高めるために、学習テーマを生徒個々が設定している。そのテーマに関わる知識が希薄なままに現地での行動を計画すると、「物見遊山」「本に書いてあったことの追体験」という水準で終わってしまう。「フィールドワーク」学習をより意義のある水準に高めるために、事前に「デスクワーク」で可能な学習から知識を得て、その中で発見された視点で、現地で可能な調査や思考が可能となる課題設定をおこなえるように導く必要がある。

cの「個人テーマとグループ行動の有機的関連」については、各校で報告される総合学習におけるこの種の個人テーマ学習に根ざした活動をフィールドワークでおこなう場合に、比較的多く生じる課題への対応である。学校行事である学習旅行（修学旅行）は基本的には現地においては、集団による活動を基礎に置かざるを得ない。しかし、グループにおける訪問地が、個人の問題設定の中で関心を高めた調査したい場所と必ずしも一致するものではない。複数の班員での関心に基づいた行動は、一方で個々の問題意識を満たすフィールドでの学習に大きな制約が生じるという点である。

この対処として様々な実践では、「テーマを学校が設定し、そのテーマの基に生徒を集合させ、行動班を決定

する」あるいは「数カ所の訪問地のうち一つは、個人の要求に基づいた訪問場所を設定する」などの方法がおこなわれている。しかし、これらの方法は、グループ内で現地での興味関心が一致しないため、「つきあわされる」という意識を生じる。生徒個々の多様な問題意識から生まれる学習動機を損なう可能性が少なくない。bで示したように、個々の問題意識が深まれば深まるほど、このようなグループでの活動との間に矛盾も大きくなる。これらの矛盾にグループの編成方法やコース設定の方法の中で、どのように対処できるかという課題が存在する。

②個人研究における問題意識の明確化

①で示した学習テーマの明確化と知識の深化のために、様々な分野、視点による講座形式の学習の場を設定した。

a 「沖縄特別講座」

5月から9月までの総合的学習の時間を利用し、本校教諭による全7回の「沖縄特別講座」を開催した。より専門に分化した全31講座（必修講座2を含む）から各生徒が興味関心から選択受講した（詳細は本論3「総合的な学習の時間を利用した講座設定(1)」参照）。

b 「講座・沖縄学」

土曜日を利用し、卒業生・保護者の協力のもと、研究者・行政担当者・企業の沖縄勤務者・音楽家・伝統工芸伝承者など沖縄に関わる専門家を招聘し、直接講義を受ける28講座を設定し、生徒が選択受講した（詳細は本論3「総合的な学習の時間を利用した講座設定(1)」参照）。

③共同研究としての学習過程における成果の共有の視点

具体的には、生徒作成文献リストの公開・共有、個人研究計画の公開などを示す。学習の成果としては生徒各自が設定したテーマの追求になるが、その過程を個的な学習蓄積に留めず、他の生徒の成果を、個人の学習研鑽の過程の中に接点を生み出す可能性を追求した。また、以上の①～③の視点における実践を実現すべく、様々な情報機器（コンピューター・ネットワークを中心とする）を活動の中で利用した。これらの利用についても示したい（本論4「事前事後学習における情報機器の利用」参照）。

2, 2年間の学習経緯

本項目では、総合的な学習の時間を中心とした2年間にわたる事前学習、学習旅行、事後の学習について、時系列を基本としながらまとめていきたい。この2年間の生徒の活動を概略すると、以下のような経緯となる。

1 年次

共通基礎知識獲得から個人研究テーマ設定へ

- ①旅行委員会による「8候補地プレゼンテーション」
- ②学年投票による訪問地決定
- ③クラス内「沖縄基調プレゼンテーション」（全生徒）
- ④生徒個々のコース選択
（本島コース、石垣・本島コース、宮古・本島コース）
- ⑤沖縄文献レポート、キーワードリスト作成
- ⑥個人研究テーマの設定と仮想コースの設定

2 年1学期

班編成とコース設定、専門的知識の学習

- ①テーマごとのグループ（班）編成
- ②「沖縄特別講座」開始（全7回、9月まで）
- ③「講座・沖縄学」開催
- ④班別コースの設定

2 年2学期

個人研究の深化とフィールドワークの実施

- ①個人テーマの完成
- ②学校オプションツアーの設定
- ③「論文の書き方」講義、論文執筆要綱提示
- ④学習旅行実施（フィールドワーク実施）

2 年3学期

研究成果のまとめと共有

- ①成果論文の作成
- ②論文要旨の作成
- ③優秀論文発表会(1)クラス内、3～7名
- ④優秀論文発表会(2)学年全体、クラス代表1名ずつ
- ⑤論文要旨集(全員の論文所収CD付き)完成・配布

以下、これらの項目を基本に活動の詳細を述べていくこととする。

<1学年次（2005年度）の活動経緯>

<1年1学期の活動経緯>

(1)入学式前教員間の理念の確認（4月）

学習旅行への取り組みは、学年発足当初、生徒入学前の学年会で開始された。担任各自が学習旅行についての想定コース案を作成した上で、学習旅行の目的地設定に向けての目標、学習旅行の理念について以下のような確認をおこなった。

候補地決定に向けての目標・理念

- ①各自の興味関心に基づき設定した課題を、現地調査・研究をおこなうことで、自己と社会・環境への理解を深める
- ②自主的な活動力の育成

- ③「(総合)学習」旅行として内容・場所ともふさわしいコース設定
- ④訪問地の分割は極力避ける。

また、海外を候補地にすることについては、①予算で行ける地域が限定される、②昨今の海外情勢が流動的である、③現地校などとの事前交流が難しい、④生徒の自主的な研究テーマの設定・調査との関わりから調査対象・調査方法の多様性を制限する、等の理由で、国内から選択することを前提とした。

(2)旅行委員会、教員と生徒理念のすりあわせ（4月19日）

各学級4名の旅行委員会を発足し、学習旅行のイメージの構築をおこなった。資料としては前2学年の成果論集などを提示し、旅行委員に学習旅行のフィールドワークとしての目的を意識してもらい、その活動に相応しい場所としての候補地選択を自覚してもらうことを目的にした。

(3)旅行委員プレゼンテーション担当地域決定（4月26日）

候補地選択をするために、便宜的に地方別の8候補地（北海道、東北、関東など）を設定、全生徒へのプレゼンテーションを旅行委員がおこなうこととした。クラス別に8つの地域を担当し、学習旅行の目的に即した題材を中心に、プレゼンテーション準備を指導した。その際に、学年全生徒がプレゼンテーション後、比較・検討ができることを目的として、各報告とも共通の雛形によるプリントを作成、配布することとした。また、1時間以内に全ての発表をおこなうという制約のもと、1地域につき4～5分の発表時間の配分であることを報告し、ポイントを絞った発表の必要性を指示した。それぞれが担当する地域でどのような学習ができるか、ゴールデンウィークを利用して調査・発表準備をおこなうことを課題とした。

(4)学年全体への学習旅行イメージの構築（5月）

学年集会を開催し、学年全体に1年半のちの学習旅行の概略、取り組みを提示した。学習旅行への諸活動が、すでに開始されたことの自覚を促す事を目標とした。

集会では、過去の成果論文の提示を含めた説明をおこない、フィールドワークをおこなうことの意義、論文作成が成果目標として存在することを確認した。

(5)旅行委員による地域別コースプレゼンテーションの実施（6月3日）

訪問先を決定するに際し、国内を8コース（北海道・東北・関東・中部・関西・四国・九州・沖縄の地方別）に仮設定した選択肢を提示した。

この8コースについて、各コースをクラスごとの旅行委員が担当し、学年全体に対するプレゼンテーションを実施した。(講堂にてLHRの時間を利用)。プレゼンテーション内容については、共通項目として「期待できる学習内容の紹介」「仮コースの設定」などを所定の用紙(B4用紙1枚)のレジюмеに記載、生徒の比較検討ができるように旅行委員が事前準備をおこなった。

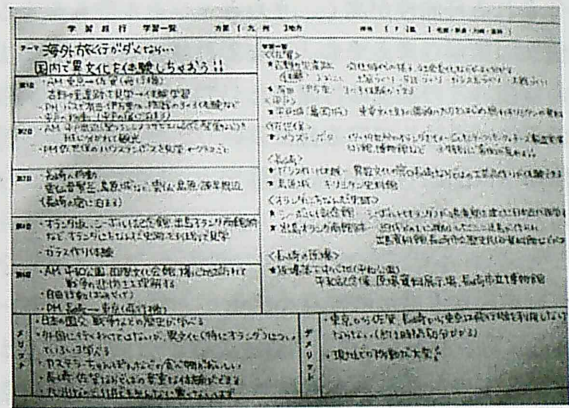


写真 旅行委員プレゼンテーションプリント

(6)候補地投票（6月10日）

LHRの時間を利用し、前週の旅行委員プレゼンテーションをふまえて、生徒全員による投票をおこなった。集計の結果、沖縄方面が圧倒的な得票を得た。14日に学習旅行予定地として沖縄方面に決定したことを生徒に発表した。

(7)業者への要請と実施1年4ヶ月前における現地状況の制約

上記の結果を受けて翌15日、旅行業者三社へ旅程検討を要請した。要請内容は以下の通りである。

- ①対象地：沖縄
- ②参加者：学年全員（360名+引率教員）
- ③ルートによる分宿可（むしろ推奨）
- ④大まかな必要最低限のテーマ性
 - ア：基地問題を含んだ平和学習
 - イ：自然環境と開発の共存と問題点
 - ウ：本土・本島・離島の文化比較
- ⑤リゾート遊び体験(パラグライダー・バナボートなど)の除外
- ⑥離島を1, 2泊入れる場合と4泊本島の場合を仮定
- ⑦グループ別の研修行動を基本として考える

(日程中にタクシー研修を想定)

⑧予算10万円前後

数日後に業者より、これらのコース要請に対する返答があった。しかし、3つの旅行者共通の懸念として、この時点で沖縄で、学年一体の行動を想定した宿舎確保は極めて困難であることが指摘された。事実上、18ヶ月以上前に予約をおこなう学校が多い中で、予約がキャンセル待ちを含め相当集中しており、特に今回の日程中の1日は、全員が宿泊できるホテルを本島内に確保することが、この時点ですでにほぼ不可能であるという状況とのものであった。分割宿泊を視野に入れての検討も、細分化される可能性が高く、またキャンセル待ちをするには優先順位から考えても、かなりのリスクが生じる状況であった。この状況の打開策として、4泊のうち、最も宿泊予約が混雑している日について、業者より本島周辺の離島(伊江島・与那国島など)への宿泊案が提示され、あらたな検討を開始した。

(8)石垣島・宮古島へのコース拡大

このような状況の中で、本島近隣の離島を中心に、コース設定を模索したが、多人数でフィールドワークを想定した場合、行動・研究テーマ設定のバリエーションが相当限定されてしまうことが明らかになった。生徒の研究テーマ設定を優先することを念頭に再検討した結果、予算面でのリスクを持ちつつも、宿舎の問題とテーマの拡大との両面を打開する方法として、石垣島・宮古島を含めたコース設定に踏み出すことを決断した。コース設定としては、①沖縄本島に4泊、②石垣島2泊、本島2泊、③宮古島2泊、本島2泊、という3種のコースを設定し、生徒の選択式を採用することに決した。

<1年2学期の活動経緯>

興味関心の拡大・基本的知識の共有

(1)生徒全員参加の「沖縄基調プレゼンテーション」へ準備を開始(9月)

コースのレイアウトが設定されたことにもとづき、実施1年前となるこの学期は、研究テーマの設定に向けて、学年の全体的な沖縄地域に対する興味・関心の向上、基本的な知識の共有、問題意識構築への視点の育成を目標設定とした。全員が分担・担当する多様な分野における沖縄に関するレポートを「沖縄基調プレゼンテーション」とし、各学級ごとで発表会をコンテスト形式で実施することとした。

(2)旅行委員会における「沖縄基調プレゼン」の概略とプレゼン・グループの決定方法の確認。

基調プレゼンの方法については旅行委員会で以下の通りの申し合わせをおこなった。

- ①テーマを8つ(言語・戦争・産業・経済・基地問題・文化・中国と琉球王朝の関わり・自然)を設定し、各学級内でのプレゼンテーションをおこなう。
- ②発表グループは各クラスでテーマに関する希望にかかわらず、機械的(出席番号を利用して編成)に8班に分けることとする。
- ③テーマを選択、重なった場合は調節し、全てのテーマが割り当てられるようにする
- ④各クラスの旅行委員(4名)は、プレゼンの水準向上のために、2グループずつの担当を持ち、アドバイスをおこなう。
- ⑤プレゼン内容は、テーマに即した側面からの概略、テーマに沿って、現地でのどのような活動が行えるかなどを中心におこなう。
- ⑥水準向上と動機付けの目的から、プレゼンはコンテスト形式とする。

①については、若干テーマが社会・経済に関わる面が詳細になった。この時期の生徒のイメージの中には自然や文化に関する項目について、具体的なイメージをまだ構築することが難しかった結果だと考えられる。

②については、この発表学習の目的が「興味・関心を広げる」という点に求められることに起因する。この時点では、生徒が沖縄という地域をまだ漠然としたイメージで捉えているため、これに固定せず、興味の有無に関わらず、基礎的な知識を広く得るために、あえて機械的にグループを設定することを決定した。

④については、各クラス4名の旅行委員が、自身の参加するグループ以外にも、一つのグループを担当し、相談役、アドバイザーとなってプレゼンテーション作成過程から関わり、内容の質的な向上を促す役割となった。

⑤について、プレゼンテーションの内容は、基本的な概略に加え、フィールドワークとして有効な訪問地を具体的に提示することを含めた内容とした。

⑦について、コンテストは以下のような基準を設定した。

<審査ポイント>

- a: 内容に興味を引く(研究テーマを考える参考として興味を引く)ものだったか。
- b: 発表の方法(声を通る、わかりやすいなど)が優れていたか。

c：グループ内の協力がなされていたか。

これらの結果をふまえ、同じ週のLHRを利用した学年集会で旅行委員よりコースの概略説明、プレゼン実施、コンテスト内容の予告をおこなった。

(3) 沖縄基調プレゼンテーションの実施（10月～11月）

(i) グループ分けと調査の開始（10月7日）

各学級でのLHRの時間を利用して、グループ分け、担当テーマ決めをおこなった。以後、中間試験を間に挟むことになるが、実質的に3週間ほどの調査期間を設定した。

(ii) 基調プレゼンテーションと審査の実施

（11月11日及び18（19）日）

各クラスごとに、8班による基調プレゼンテーションを実施した。1時間に4班、1班あたり7,8分の報告時間とした。プリント形式を中心に様々な方法を可能とした。発表班以外の生徒には審査用紙を配布し、報告後に回収した。

発表終了後には審査用紙を集計し、各クラスの優秀班を選出した。

コースの選択と個人テーマの検討へ向けて（12月）

沖縄地域における基礎的な知識の共有と、フィールドワークの具体的事例を学習した上で、3つに分類されたコースの選択をおこなった。

(1) コース選択調査票配布・提出（12月2日）

①本島コース②石垣・本島コース③宮古・本島コースの中から希望選択をおこない、集計をおこなった。その結果、①本島コース61名②石垣・本島コース194名③宮古・本島コース103名という結果となった。この数値をもとにあらためて宿舎等の具体的検討に入った。

(2) 生徒個々の問題意識の深化へ（文献一覧表の掲示）

コースの選択に伴い、それぞれの問題意識の構築に向けての活動段階に推移した。各クラスに他校実績を含めた「沖縄関連文献一覧表」を参考として常時掲示した。

(3) 「沖縄学講座」の講師募集開始

次年度6月実施予定の「沖縄学講座」の講師の募集について保護者、卒業生へ協力を求めた（本論3参照）。

(4) 冬季休業中課題「沖縄関連文献内容レポート作成」

本学期的学習目標としての沖縄の基礎的知識の獲得・興味関心の拡大をふまえ、そこから獲得した生徒個々の問題意識を深めていくために、自分が興味関心を持った沖縄に関する文献を2冊選択の上、内容レポートを作成することを課題とした。提示課題は以下のような内容とした。

- a：レポートはA4用紙1枚に集約、字数・行数書式を提示して共通とした。
- b：文書データとプリントアウト1枚を提出する。
- c：1つの文献ごとに、内容に関わるキーワードを4つ提示する。

<1年3学期の活動経緯>個人のテーマの設定・深化

(1) 「沖縄関連文献内容レポート・キーワード」提出

冬季休業中課題の「沖縄文献内容レポート」の提出については、生徒個々が課題から作り上げた成果を、互いに共有し、自己の研究視点、知識獲得の機会を広げることを目的として、各学級に設置されたクラス・コンピューター端末の共有ファイル内にデータを提出することとした。これらのデータ管理は旅行委員がおこなった。また、旅行委員は各生徒から提出されたレポートの内容に関するキーワードを収集し、キーワード・リストを作成した。文献内容レポートを各学級のコンピューターにデータとして保存することによって、生徒がお互いの成果を閲覧し、またキーワードなどを利用して検索をおこなうことで、自分に関係の深い文献情報を広げることを可能とした。

(2) 個人テーマの第一次設定（2月）

個人の研究テーマを各自設定し、候補を2つ提出した。この作業の目的は以下の2点である。

- ①生徒各自のテーマ設定の途中経過を確認。
- ②各自の意識を高めることとコース決定に向けての導入。

個人テーマの提出に当たっては、以下の点を記載事項として雛形を作成した。

- a：テーマタイトル（仮）
- b：既に調査した内容、今後調査しようと感じていること（疑問点など）
- c：具体的な調査方法

以上を課題として、各自の作業を課した。また石垣島・宮古島を訪問する生徒については、基本的には実際の行程前半をすこす石垣島あるいは宮古島でのテーマ1

つと、後半を過ごす本島でのテーマを1つ設定することとした。

(3)フィールドワークを想定した仮想計画の作成 (春期休業中課題)

(具体的な計画へ向けて、仮に個人テーマを中心とした場合、どのようなフィールドワークが可能であるかをシミュレーションする試み)

2月に策定した個人の研究テーマについて、そのテーマを追求するという仮定のもとに、どのようなフィールドワーク(訪問先、活動)が可能であるかを「(仮想)計画設定」する試みである。もちろん現実にはグループによるフィールドワークをおこなうのであり、個人で行動計画を策定しても、それが実現するわけではない。この活動の目的は、次の段階でおこなう実際のグループ活動計画を策定を、より具体的かつ実際に議論するための前段としておこなうものであった。

春期休業中の課題として以下のような設定をおこなった。

2月に設定した研究テーマを実現するために

- a: 学習旅行実施当日の仮計画(「仮コース」の設定)
- b: 現地での調査方法
- c: 自分のテーマについての先行研究などの調査

(4月8日提出)

<2学年次(2006年度)の活動>

(1)近い研究テーマを基礎としたグループの編成(4月)

新たな学年が始まった時点で、実際の現地での行動をともにするグループの編成に移った。このグループ編成にあたっては、本稿冒頭部<視点>の②cで示したように、班員の持つ複数の関心に基づいた行動は、一方で個々の問題意識を満たすフィールドでの学習に大きな制約が生じるという矛盾をどのように克服すべきかという点を大きな課題として取り組んだ。1年次の3学期から春期休業期を利用して深めてきた生徒個々の研究テーマと、グループでのフィールドワークにどれだけ整合性を持たせる方法が工夫できるかを検討した。その結果、以下のようなプロセスを踏み、グループ編成を試みた。

・班編制方法

①訪問地のコース別に集合

- ・石垣・本島コース(Iコース)
- ・宮古・本島コース(Mコース)

・本島コース(Hコース)

行く先別で以上の3コースに分かれる。

②個人のテーマをもとに3つのカテゴリー(自然環境・伝統文化・社会)に分類

生徒のグループ編成は基本的に、「現地で調査したいこと」「現地で研究上の必要で訪問したい場所」が、なるべく重なるか、あるいは近い関心を持って行動できるように、個人の研究テーマの近似性・類似性を基本に構成が可能となるような設定を考えた。そのために、あらかじめ、学年で3つのテーマ・カテゴリーを設定し、生徒は自分がすでに提出した個人テーマが含まれる以下A~Cのカテゴリーごとに集合した。

<テーマ・カテゴリー>

- ・自然環境(Nグループ)
(植生・環境・開発・気候・地形など)
- ・伝統文化(Cグループ)
(工芸・文学・言語・思想・城・音楽・建築など)
- ・社会(Sグループ)
(歴史・経済・産業・基地・教育など)

この結果生徒は、3コース×3テーマの9つの集団に分類された。例えば石垣・本島コースで自然環境をテーマとした集団(便宜上記号でISコースと示す)、本島コースで文化をテーマとした集団(HCコース)などである。

③同じテーマカテゴリー、同じ行き先の中で、基本的に4人のグループ(班)を結成する。(この際、ホテルの部屋も同じ班になることを示し、同性で班を編成することを条件にした。)従って、必ずしもこれまで強い接点があるとは限らないメンバーの中から班を構成することとなる。生徒は「親しい人」「同じクラス」「部活が一緒」等の要因から班編制をイメージしていたものも少なくなかったが、これについては「個人の研究・学習を中心とする学習旅行の本義」を4月当初から説き、その目的に基づいた班編制をおこなうことを幾度か示して、この方法への理解を求めた。実際の班編成にはいと、担任団が心配していたほどの混乱は生じず、比較的順調に班編制が進んだ。班人数は各集団の人数差や男女比などの問題から、5人班、3人班が数班生じたが、おおむね4人の班に収まった。また、人数の少なかった集団では男女が独立して一つの班を編制することができず、1班だけ男女混合班が成立することとなった。

④このように結成された班で、これまでの作成した班員個々の個人研究活動予定(「仮コース」)をお互いに提示

し、調整しながら班としての原案を作成していく。比較的近いテーマの生徒によって構成された班のため、それぞれの個人テーマによって仮に作られた訪問地、現地での活動はお互いのテーマに関連したものとなることが多い。このように、個人の興味関心と実際の班行動が比較的一定の整合性を保ち、現地での班ごとのコース設定が可能になった。この結果、およそ90の班が成立した。

(2)テーマの深化とグループコースの設定①（5月）

・沖縄特別講座開始（本論1「学習活動の視点」②a参照）
総合的学習の時間を利用し、全7回の本校教員による「沖縄特別講座」が開始された。第一回はコース設定の前提として必要と判断したため、全生徒共通の「フィールドワークの進め方」の講座を実施した。学年で共通資料を作成し、担任・副担任が同時間に各学級で一斉に講義をおこなった。以後、「沖縄特別講座」は9月の最終講座「論文のまとめ方」まで継続して実施された（本論3「総合的な学習の時間を利用した講座設定」参照）。

(3)テーマの深化とグループコースの設定②（6月）

「講座・沖縄学」開催（本論1「学習活動の視点」②b参照）
外部より専門家の講師をお招きして、29講座を開講した（土曜日、全2回）。生徒は自身の研究テーマをふまえた選択受講をおこなった（詳細は本論3「総合的な学習の時間を利用した講座設定」②参照）。

(4)班ごとのコース検討の開始

およそ90班ほど成立した各班が、それぞれ作成した班別の行動計画を具体化するために、学校に担当旅行業者を8名ほどアドバイザーとして呼びし、実際に計画した各班のフィールドワーク、コース設定について、時間的・経済的側面、期待どうりの活動ができるかなど、現実的なコース設定の確認をおこなった。具体的活動方法は以下の通りである。

- ①各フロアの活動教室の前の廊下に、以下の図のように旅行業者ブースを設置（旅行委員が準備）。
- ②生徒はコース・テーマごとに割り当てられた教室に集合。各教室に担当教員配置。
- ③各教室で担当教員が、すでに提出されているグループの計画用紙を生徒に返却。
- ④担当教員が、事前に確認した計画用紙の内容を参考に、計画の比較的固まっていると思われる班からブースに誘導。
- ⑤業者ブースの相談以外の班は、計画の不備・曖昧な

点を指摘しながら内容を詰め、一層の具体化・精密化をおこなう。

⑥その際、無線LANとつながるノートパソコンを45台配布し、インターネットなどの情報を駆使しながら確認をおこなえるようにした（詳細は本論4「事前事後学習における情報機器の利用」参照）。

⑦基本的には総合の時間の活動の中で終わられるように配分したが、一部終了できなかった班があったため放課後に対応した。

⑧終了時に、旅行業者のアドバイスを受けての変更、再考等を書き込んだ計画用紙を教員が回収。

このような活動の後に、生徒から回収した計画表をPDFファイル化して保管することとした。

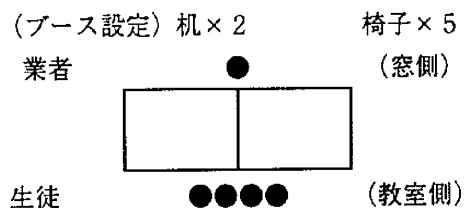
<業者との確認相談模式図>

3階

旅行業者	ブース1	ブース2	ブース3	ブース4	ブース5
生徒班	I N男	I N女	I C男	I C女	I S
教室	地理	歴史	2C	2B	2A
教員	浅羽	佐藤	菅野	若宮	祖慶
3階廊下	藤野（全体確認・ブース間調整）				

2階

旅行業者	ブース6		ブース7	ブース8	(予備) 2D
生徒	H S	HC・HN	MN	MC・MS	
教室	2H	2G	2F	2E	
教員	田中ま	佐久間	宮城	古山	
2階廊下	田中ゆ				



このような形式の旅行業者との班別相談会は7月にも再度実施し、最終的に90班90通りのコースが確定した。

(5)班ごとのコースの概要

班別コース宮古島文化 (MC) の例 (2~4日目)

(2日目~3日目午前は宮古島内、3日目午後は沖縄本島への移動、4日目は本島内)

班	14 (火)	15 (水)	16 (木)
MC01	西原地区公民館 下里大通り	重信民謡研究所	おきなわワールド 琉球村 米軍関係者インタビュー
MC02	宮古島市総合博物館 郷土料理教室 (宮古観光協会) 雪塩製塩所	西里通り 下里大通り 平良市公設市場 古謝そば屋	国際通り 平和通り おきなわそば打ち体験 ナゴパイナップルパーク
MC03	石嶺豆腐店 西原地区公民館 (御嶽めぐり) 雪塩製塩所 宮古農政・農業 改良センター	平良市公設市場 沖縄製糖所見学	琉球大学 ファーストフード店「jef」 牧志公設市場
MC04	大神島 まほろばの里(民謡ショー) 大城見学	張水御嶽 人頭税石 西銘御嶽 総合博物館	沖縄市立郷土博物館 玉城城跡 斎場御嶽
MC05	公設市場 太陽だ窯 うえのドイツ文化村	ホテル近く散策 宮古伝統工芸 研究センター	首里城 おきなわワールド 琉球村
MC06	公設市場 ユートピア ファーム宮古島 郷土料理教室 (宮古観光協会)	来間島 (海底観光船は 乗らない) 牧志公設市場	小学校(食生活 取材) むら咲むら
MC07	人頭税石 総合博物館 宮古伝統工芸 研究センター	海宝館(貝細工 体験) ビーチ	琉球の館→自分で 予約 おきなわワールド 那覇市伝統工芸館 (首里織りを特に 追求)
MC08	宮古伝統工芸 研究センター 沖縄県立図書館 宮古分館	総合博物館 張水御嶽	玉城城跡 那覇市伝統工芸 館 斎場御嶽
MC09	シュノーケリング 島唄館(綾語)	重信民謡研究所 楽器店巡り	FM 沖縄 金城三線製作所

班別コース石垣島社会 (IS) の例 (2~4日目)

(2日目は石垣島が周辺離島、3日目午前は石垣島内、3日目午後は沖縄本島への移動、4日目は本島内)

班	14 (火)	15 (水)	16 (木)
IS 01	仲間川ツアー (エコ体験ツアー)	市街地散策 市役所港周辺 インタビュー	アメリカン レッジ 中央パークアベ ニュー

IS 02	竹富島:	市役所 八重山平和祈念 資料館	ひめゆりの塔 県立平和祈念資 料館 佐喜真美術館
IS 03	八重山平和資料館 八重山保健所イ ンタビュー	石垣市八重山病院 インタビュー・ 訪問	琉大附沖縄地域 医療研究所 旧海軍指令本部壕 ひめゆりの塔 平和祈念資料館
IS 04	伝統工芸館 みんさー工芸館 (体験) 石垣焼窯元製糖 工場	請福酒造泡盛博 物館八重山博物 館	那覇市伝統工芸 館
IS 05	西表島仲間川ツ アー(エコ体験 ツアー)	唐人墓 宮良殿内 街頭で聞き込み ホテルスタッフ へインタビュー	嘉手納基地 普天間飛行場 平和団体(市民 連絡会) ホテルグランメ ールで米軍関係者 インタビュー
IS 06	竹富島 竹富民芸館 喜宝院蒐集館 コンドイビーチ (雨天時:竹富島 ゆがふ館)	宮良川カヌー 島内観察 (石垣島観光~飛 行場までの道の り)	国際通り 識名園 おきなわワールド

このように、各コース、班ごとのテーマの特色があらわれたコースが設定された。この他にも、例えば沖縄の食生活をテーマにしたグループが他班より特別に活動開始時間を早めて朝市に調査に行ったり、老人ホームや小学校を訪問し、インタビューやアンケートを実施するなどの計画や、民間信仰を中心テーマとしたグループが、御嶽を数多く回るルートや、それぞれがアポイントメントなどで対象機関と交渉することも含め、具体性を帯びた計画準備が開始された。

(6)コース、個人テーマの再設定、確定

夏期休業中課題:個人テーマの完成

(グループから再び個人テーマへ)(7月)

以上のように、2年1学期の活動の中心は班編成、班ごとのコース設定の具体化に終始した。しかし、学習旅行は、生徒個々の問題意識から生み出された活動であることが原点であり、最終的には生徒個々が問題追及を行う論文に集約される。そこで実際に訪問する場所が確定したこの時点にあらかじめ「個人のテーマ学習の計画と展望を深めること」に視点を戻し、2年次夏期休業中の課題を以下のように設定した。

- ①自分のテーマの内容を文章で(150~200字程度)記入。
- ②これまでの調査の成果を文章で(300字程度)記入。
- ③事前におこなうべき調査のうち、残された課題を記入。
- ④学習旅行中に訪問する場所での、研究テーマに即した

活動と獲得目標を明記（実際におこなう質問を具体的に列挙、どのような観察をするのかなどを文章で記入）。

この課題の基本的な目的は次の2点である。

- a：自身の研究課題の進展を確認すること、
- b：東京などで可能な作業を認識した上で、現地でしかできないことを区別させ、より意味のあるフィールドワーク計画を策定すること、

提出方法については、課題記入用紙を作成し、クラスパソコン・デスクトップから各自がデータ・コピーし、2学期にクラスパソコンに作成したファイルにデータを提出することとした。

<3年2学期の活動>

学習成果の獲得目標設定明確化9月～10月

(1)「論文の書き方」講義、論文執筆要領の提示

学習旅行実施学期をむかえ、学習旅行が次第に現実味を増す中で、生徒個々に学習旅行での獲得目標を明確化させていくことを目標に活動をおこなった。1学期からの沖縄講座が継続されるとともに、その最終回として、9月末に全員必修講座「論文の書き方」の講義を総合的学習の時間に実施した。10月には「論文執筆要領」を以下のように発表・配布した。

(論文執筆要領内容要旨)

- ①用紙 A4
- ②書式 横書き、40字×40行余白四方2cm
- ③分量 7枚以上10枚以内（写真、図表を含む。表紙・目次・参考文献リストはこの枚数から除く。）
- ④内容 序論（研究を始めた動機や研究目的）
方法（研究の具体的方法）
結果と考察（調査、実験した結果と考察）
結論（導き出された結論と研究の総括）
キーワード（論文中の重要単語を5語程度）
参考文献一覧（引用文献・論文・新聞・URL）
- ⑤論理的構成であること、旅行記ではない。

このように旅行に先立ち、事前に「論文執筆要領」を確認することによって最終的な目標のイメージをある程度想定した上で、必要な資料や調査取材をより明確化することが可能となり、実際の学習旅行での活動の意義を認識することを目的とした。

(2)オプショナルツアー（学校オプション）の募集

一方、夏期休業中の課題として、生徒個々がテーマを深めていく中で、テーマによっては高校生がアポイントとることが難しい現地取材、また、少人数ではなかなか実現しない企画など、すでに想定していたフィールドワーク計画の中には、なかなか実現できない調査も存在することがわかった。そこで、教員が実地踏査を重ねる中で作り上げた人的関係の中から、生徒が個的にアポイントが難しいような設定の訪問、インタビューなどを企画したオプショナルツアー（学校オプション）を設定、募集を開始した。この時期に提示することで、各グループの活動を補うという位置づけでこれらの企画が生かされることとなった。

オプショナルツアー（学校オプション）の例

①米軍基地関係者インタビュー

沖縄市商工会議所役員。

沖縄本島で実施。4日目宿泊ホテル（沖縄市）は米軍軍人や関連業者などが日常的に利用する。このホテルに仲介となっただき、基地に関連のある方へのアポイントメントを取っていただいた。実際にお引き受けいただいたのは、沖縄市の商工会議所の役員をされている方で、基地との関係のみならず、関係しながら生活を送る住民としての立場からも意義深い講義をお願いすることとなった。外国籍の方であり、実際は日本語での生活が中心とされる方ではあるが、当日は状況を見ながら可能な限り英語で講義、質疑応答をおこなうということをお願いした（実際、1時間以上の講演および質疑応答は全て英語でおこなわれた）。

②八重山の戦争とマラリア被害（八重山平和祈念館）

石垣島。教員の実地踏査時に八重山平和記念館の学芸員の方に依頼。展示の解説をいただきながら、1時間程度のコースで見学させていただくこととなった。また、条件が整った場合は、石垣島の戦争体験者の方から直接記念館でお話を伺える企画の可能性も提示いただいた。

③川と海的环境維持について（石垣島沿岸レジャー安全協議会会長）

石垣島。学習旅行時におこなうマングローブ林カヌー体験やシュノーケリングの業者の社長が、様々な資格をお持ちであり、自然環境保護に関わる活動をされている方であった。環境維持と観光業の共存を、実際の観光業

にたずさわる立場からお話しいただけるように依頼した。

④珊瑚の環境保全プランとその実行（環境省国際サンゴ・モニタリング・センター）

石垣島。環境省の研究機関である同センターは、基本的に修学旅行などでの見学を実施していない。実地踏査時に訪問し、研究的視野の解説、石垣珊瑚のおかれた現状、アジア近隣諸国との連携した珊瑚を廻る取り組み、環境省の取り組みなどを講義していただくことを依頼した。

⑤石垣経済の現状（1, 2日目宿泊ホテル社長・専務）

石垣島。リゾート開発が急激に進む現実と石垣経済の現状などをお話しすることをお願いした。地元出身の経営者の立場から本土からの巨大資本による開発との関わり、急激な変化から将来への展望と危惧などと共に、一方で石垣島住民としての切実なお気持ちをお伝えいただくをお願いした。当日は大変熱のこもったお話をいただき、「石垣特有の観光業とは」「本土観光に対してどのような付加価値が必要か」「10年後の石垣の状況の明暗」など、生徒の質問に2時間以上のお時間をいただくことになる。

（このほかに公民館にお集まりいただいた高齢の方々から御嶽を中心に、民間信仰についての話をうかがう企画や、戦時中の八重山のマラリア禍のお話をうかがう会などもあったが、当日生徒と先方のご都合で実現しなかったものもあった。）

生徒は自分の班の調査研究対象に必要であるという参加希望を募り、各班の計画への組み込み、調整をおこなった。

(3)島内共通研修(石垣島・宮古島コース初日午後)の設定

当日の全体の行動計画が確定する中で、石垣島・宮古島コースは、初日午後半日は、バスでコース全員での行動をおこなうことが確定した。その際に、全員で訪問・体験する場所を社会、文化、自然の各テーマに対し基礎的な理解を有む場を選んだ。例えば河川が無い宮古島の地下ダム見学のよう、島での生活環境への理解を深めるために共通理解として必要と考えられるような見学場所を設定した。

石垣島初日：

①マングローブ植樹体験

②真栄里ダム見学

③川平湾（グラスボート）見学

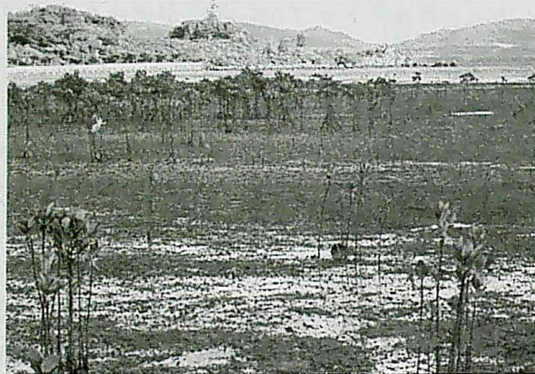
④三線演奏、カチャーシー体験（夕食時）

宮古島初日：

①東平安名崎訪問

②地下ダム施設見学

③宮古海宝館



写真：マングローブ植樹体験

上記の学校オプションや、全員での訪問コースをふまえて、各班のコースの再確認、最終調整をおこなった。

また、各自のフィールドワーク訪問地へのアポイントメント確認、しおり作成などを含めた準備確認を促した。

(4)学習旅行（フィールドワーク）の実施（11月）

2006年11月13日（月）～17日（金）

以上の調整をふまえ、当日を迎えた。5日間の日程概略は次の通りである。

☆グループ別研修=タクシーによる4人のグループ行動

日		本島コース	石垣コース	宮古コース
1	A	移動	移動→石垣へ	移動→宮古へ
	P	グループ別研修	バス島内研修	バス島内研修
2	A	グループ別研修	グループ別研修 (離島含む)	グループ別研修 (離島含む)
	P	グループ別研修	グループ別研修 (離島含む)	グループ別研修 (離島含む)
3	A	グループ別研修	グループ別研修	グループ別研修
	P	グループ別研修	グループ別研修 移動→那覇へ	グループ別研修 移動→那覇へ
4	A	本島で行動（グループ別研修）		
	P	グループ別研修		
5	A	(クラス別研修 バス) → 首里城 (モノレール) →那覇空港集合		

(実施上の特徴)

①タクシー研修

沖縄県内の移動は基本的にバスまたはタクシーとなる。公共バスを乗り継いでの移動も検討したが、時間的な効率から訪問地が数の上でも、地域的にも限定されてしまうので、個別のコースへの対応が困難であることが予想された。その結果タクシー利用を中心とした設定となった。

②まとめの時間の設定

各コースとも、ホテルの状況によって違いはあるが、可能な限り、夕食後の時間に1時間程度の「一日のまとめの時間」を設定した。ホテル内で食事会場など、多人数が一同に集まれるスペースがある場合はそこに集合し、その日の活動の確認、調査の成果やデータの整理、記録の確認などを、班員が集まった場所でおこなうこととした。また、翌日の計画確認などにこの時間を利用する班もいた。



写真：米軍関係者へのインタビュー風景



最終日：唯一のクラス行動



学習旅行の様様を伝える学年通信
(生徒作製のイラスト旅行記より作成)

<2年3学期の活動>研究成果のまとめと共有

(1)論文の作成 (12月冬季休業中課題)

学習旅行が終了して定期考査を経た後、12月までに訪問地、調査に協力していただいた方々への礼状作成を促すと共に、冬期休業課題として学習旅行論文の作成を提示した。(体裁など概略については前述の通り、10月に提示してある。)

<冬季休業中課題概略>

学習旅行論文作成 (A4版10枚程度)

2007年1月

- ・論文提出は写真、図なども含まれるため、全文PDFファイル化した上で、学年全員分を一枚のCD-Romに集約することとした。

(2)論文要旨集の一斉作成 (2月)

学年生徒360名分の論文本文を前述のようにCD-romに所収するとともに、以下のような方法で論文要旨集を作成した。

- ・一人あたりA5横書き1枚(本文400字程度)。
- ・ひな形を作成。文字ポイント等も含め体裁を統一。

- ・総合の時間を利用して、一斉作成。
- ・無線 LAN 等利用し、クラス全員が一斉にコンピューターを利用（詳細は本論4「事前事後学習における情報機器利用」参照）。
- ・用紙をダウンロード、サーバーにアップして提出。

(3)学習旅行アンケートの実施

論文要旨作成と並行して学習旅行アンケートを実施した。質問要旨の配布・回収は論文要旨作成と同様に、コンピューター上でおこなった。

(4)優秀論文発表会への準備(優秀作品のクラス発表会)(2月)

すでに1月に提出された生徒の論文から、各学級担任が優秀と思われる作品を各学級で4～7本ほど選出した。各学級では「優秀論文クラス内発表会」を開催し、選出された4～7名の生徒が論文内容の発表をおこなった。

プレゼンテーションの方法はプリント利用、パワーポイント利用、実演など、様々な工夫が凝らされた。

他の生徒には評価用紙を配布、クラス最優秀作品の選考をおこなった。

(5)学習旅行優秀論文要旨発表会(5月)

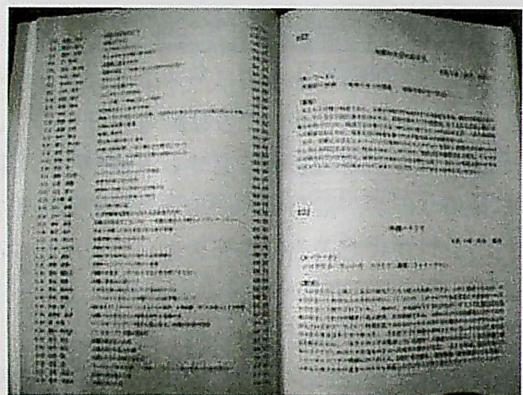
2月のクラスでの発表、選出を経て、各クラス代表による「学習旅行優秀論文要旨発表会」を開催した。学年生徒全員が審査をする中、8クラスの代表が講堂にて発表を行った。この発表会は本校の「情報公開研究会」の一部としても公開され、一般の参加者も加わる中でおこなわれた。8人の代表の生徒のテーマは以下の通りである。

- ①「食が私たちに与えるもの-石垣島と沖縄本島の食生活の比較を通して」
- ②「三線～癒しの音～」
- ③「沖縄における観光業の課題・今後の展望」
- ④「沖縄観光産業の今とこれから」
- ⑤「沖縄はなぜ独立しないのか～帰属の歴史と沖縄人アイデンティティー～」
- ⑥「琉球の染色文化とその伝承～職人から伝統文化のあり方を学ぶ～」
- ⑦「宮古島の水事情～川のない島での学生たちの知恵～」
- ⑧「宮古島人々の意識と信仰」

まさに90通りのコース設定の成果と思われる、多様なテーマ構成となった。

(6)学習旅行論文要旨集(A4、198ページ。全論文を所収したCD-rom 附属)完成、配布。

旅行委員が編集を担当し、論文要旨集が完成した。CDは担任団で全論文のPDF化を行い、生徒のラベルデザインを配して、コピー作成した。



3、総合的な学習の時間を利用した講座設定

(1)「沖縄特別講座」

2年では、時間割のなかに「総合的な学習の時間」が入ってくる。5月から9月まで、この枠を使って本校教諭による全7回の「沖縄特別講座」を行った。学年内外を問わず21名の方々をお願いして、自然科学・社会・文化……さまざまな視点から沖縄にアプローチする講座を開いていただいた。具体的な進行については以下の通りである。

講座の開講まで

平成18年度の3学期に、全教諭に対し「沖縄に関連する講座」を開いていただけないか依頼した。その結果を受け、新年度の時間割編成との兼ね合いもにらみながら、暫定のプログラムを組んだ。生徒たちに暫定プログラムを提示し、仮希望調査を行うためである。そして新学期を迎えた4月、希望者数を参考に講座ごとの開講回数を

決め、最終的に全7回の時間割を組んだ（表1）。結局、「フィールドワークの進め方」「論文の書き方」の必修2講座を加えて31講座の中から、各生徒が興味関心のある講座を選択して受講するかたちとなった。

講座を終えてみて

生徒の希望を最大限優先したため、講座によっては適正人数を大きく超えてしまい、担当の先生にご迷惑をおかけしたケースがあった。また、講義形式であるため、どうしても生徒たちが受け身の姿勢になりがちであったことも否めない。しかし、普段の授業の枠を超えた、先生方の思いのこもった内容は、生徒たちにとって印象深いものであったようだ。例えば、事後に行ったアンケートでは、沖縄本島出身の祖慶教諭の「私説『沖縄』概論」に対して「沖縄の人が何を考えているかがリアルに伝わってきて鳥肌がたちました」「本土復帰直後の沖縄を生で見た人の話が聞けたのは貴重だった」「祖慶先生の沖縄出身であることに対する意識の高さがすばらしかった」といった感想が寄せられている。

また、この特別講座によって、全生徒に「沖縄」に関する基礎的な知識をがっちりと与えられた点も特筆すべきである。現代沖縄が直面している基地問題、第二次大戦下の沖縄戦から本土復帰に至る道のり、さらにはまで……これらの歴史を知らずして沖縄を訪れることは許されないであろう。希望する講座を受講するかたちであったが、結果的にほぼ全ての生徒がこのようなことを学べたのは非常に意義深いことであったと思う。

最後に、直接沖縄にはかかわらない講座であるが、必修の「論文の書き方」に意義を見いだした生徒が多かったのも、私たち教員には嬉しい驚きであった。「論文とはどういうものであるべきかが分かった」「将来に役立つと思う」という感想が多数寄せられた。生徒たちの「論文」さらに「研究」というものへの関心の高さを感じた。高等学校での「総合的な学習の時間」が、大学以降の学問や研究活動への助走となっていく様相を見ることができた。

(2)「講座沖縄学」

出発点

学習旅行の事前学習は、方法・内容ともに51期の実践を継承することになった。具体的には本校教員が担当できる内容を申告し、生徒が受講する、というものである。私は51期生に「沖縄の方言」というテーマで授業を行った。私なりに準備をしたつもりではあるが、沖縄を訪れ

たことのない人間が沖縄について語るのには隔靴搔痒の感が否めなかった。また、テーマの偏り——生徒が望むテーマを提供できない——も問題があると思われた。

そこで52期では、本校教員による講座を用意する一方、沖縄にゆかりのある方々から話を聞く機会を設けることとなった。総合の時間は金曜の6限に置いてあるが、校外から講師を招くには中途半端な時間帯でもあり、思い切って土曜日に行くことにした。週休2日制になったが、土曜日を活用したい、という思いが以前からあった。また、講師は本校の卒業生や保護者にお願いしようと考えた。各界の第一線で活躍されている方が多い。豊富な人材を活用し、生徒たちに刺激を与えたいというねらいによる。

経過

- 2005. 10. 27 学年会で提案し、趣旨を説明。→6月3日（土）、24日（土）の2回行うことに決まる。
- 2005. 11. 10 職員会議に提出、了承。
- 2005. 11. 12 51期・52期の保護者向けに講師依頼文書送付
- 2005. 12. 20 同窓会松林さんに講師依頼メール送付（1.27再送）
- 2006. 1. 27 沖縄タイムス、琉球新報社、沖縄学研究所、法政大学沖縄文化研究所に講師依頼メール送信。26名の方から情報をお寄せいただく。主にメールのやりとりを通じて、どのような内容にするか打ち合わせを行う。
- 2006. 5. 19 生徒希望調査・集計
- 2006. 5. 25 希望者数に偏りがあったため、追加募集
- 2006. 6. 3 6. 24当日は大きな混乱もなく終了。欠席者は各クラス数名。

11月に保護者向けに依頼文書を送付したが、反応は鈍く、1件のみであった。ただ、生徒の叔父に当たる方が仲介の労をとってくださり、三線の演奏家や沖縄料理の専門家の方をお呼びすることができた。

1月には松林元同窓会会長の働きかけにより、卒業生の方々から次々と情報が寄せられた。結婚して沖縄に住んでいらっしゃる方、沖縄に行かれる際に利用するペンションのオーナーが環境保護に詳しい、会社に沖縄出身の人がいる、友人に沖縄出身の人がいる、仕事のため沖縄で3年間暮らした、といったメールが寄せられた。

せっかく沖縄にお住まいなのに、時間の都合などで講義を断念された方もあった。また、Aさんが沖縄出身の

Bさんを紹介して下さり、Bさんと交渉したところ、Bさんが「私より適任がいる」とCさんを紹介して下さった（Cさんに来ていただいた）例もあった。

結果的に、のべ28講座を開講することができた。以下、生徒の希望調査用に作成した講師のプロフィールと概要、事前に生徒に向けて頂いたコメントを紹介する。

「講座沖縄学」講師プロフィール

講座番号1

「サンゴの海・沖縄の自然を楽しもう!!」

ケニーズハウス北川PAD Iダイビングインストラクター、日本自然保護協会自然観察指導員、サンゴの産卵を観察するため、1年弱沖縄ケラマ諸島に在住。

それまでは、沖縄エコツアーを開催し沖縄の自然の素晴らしさを体感していました。私達の住んでいる本土とは違う、亜熱帯の沖縄。沖縄には、本土では体感する事が出来ない自然がたくさんあります。沖縄と言えばサンゴの海Ⅱ沖縄のサンゴの海は、世界でも有名です。せっかく行く学習旅行で、沖縄の海・自然を120%楽しむ為の方法を伝えたいと思います。また、きれいな海の中には、危険生物もいますので注意点などもお話したいと思います。

講座番号2

「沖縄の謎? (沖縄にいくと感じる疑問あれこれ)」

本校35期卒業、現在東京都立高等学校教諭。修学旅行の実地踏査で2000年に初めて沖縄に行く。それ以来なぜか沖縄にはまり、その後10数回沖縄各地に旅行、本年12月に修学旅行で沖縄にいく予定

沖縄にいった際に感じた、疑問やいろいろな報道や情報に触れた際の疑問を列記していくことで、沖縄修学旅行の際に感じてもらうための準備。

講座番号3

「楽しく学ぶ、おきなわカルチャー」

沖縄県昭和薬科大学附属高等学校卒業、株式会社ファンケル・経営戦略本部・経営企画部所属。

高校卒業までの18年間を過ごしました。沖縄関連の曲の歌詞から、沖縄の一般的な文化を紹介したいと思います。生活文化や人々の生き方、考え方などを音楽を聞きながら楽しく紹介したいと思います。また、本土と沖縄とのギャップや、沖縄での受験勉強、私自身が上京したときのことなども少し紹介し生徒の皆さんが将来を考え

るうえでお役にたてればと考えております。

講座番号4・10

「ヤマトウヌユーからアメリカユー（日本と米国占領下の沖縄）」

元桜美林大学教授。1941(昭和16)年沖縄県(本島南部)生まれ。高校まで沖縄。米国留学後、Weekly Okinawa Times 及び沖縄タイムスの記者。

沖縄に関する著書：『沖縄戦—米兵は何を見たか50年後の証言』、『戦争はベテンだ—バトラー将軍にみる沖縄と日米地位協定』、Democracy Betrayed : Okinawa under U.S. Occupation (『裏切られた民主主義：米国占領下の沖縄』)

米国は、沖縄戦開始とともに、沖縄を日本本土と切り離して占領下においた。その後、1952年の対日平和条約の第三条により、正式に琉球列島とその住民に対する行政・立法・司法権を行使できるようにした。本講義では、沖縄戦と初期の米軍占領について簡単に述べたあと、日本国憲法が沖縄に適用されず、沖縄住民の国籍もあいまいにされた事実、その後の米国の軍事優先占領に対する住民の反発と本土復帰への願い、そして日本政府の対応について論じる。時間が許せば、憲法と日米地位協定の矛盾についても話したい。

講座番号5・9

「ウミガメ保護活動を通じた環境保護活動」

NTTの労働組合の活動の一つとして、NPO日本ウミガメ研究所(黒島)との交流を行っている。2003年度からの取り組みで、湾岸清掃や生物観察を通して、環境保護の大切さについて学んでいる。記録ビデオの放映と活動紹介。

講座番号6

「沖縄の自然・生物と環境問題」

WWFジャパン自然保護室。1980年頃から沖縄の希少鳥類の調査(日本野鳥の会)、1990年頃から白保サンゴ礁、泡瀬干潟、ジュゴンの海、やんばるの森などの保護活動(WWFジャパン)。

亜熱帯にある沖縄の島々(琉球列島)の自然の成り立ち、生物の特徴と現状、森や川、海の自然破壊のようすについて説明し、その背景、原因について考える。

講座番号7・11

「沖縄の自然と文化(黒島口説きの世界・他)」

沖縄県読谷村出身。生涯教育・小中高大学の課外授業

やサークルなどで、沖縄の芸能・文化や自然について講演している。現在は二人とも埼玉県さいたま市在住であるが、沖縄とヤマトの文化の橋渡し役になり、多様な文化の交流ができることを願っている。

黒島は石垣島から船で約30分の、周囲13kmの小さな島だが民謡の宝庫といわれ、たくさんの島唄がある。その黒島口説きを中心に、沖縄の自然や文化について話す。

講座番号8・12

「沖縄における米軍基地問題」

外務省北米局日米地位協定室長。沖縄における米軍基地問題について、これまでの仕事の中で取り組んできた在日米軍再編協議の中身を含め、これまでの経緯と将来の展望につき話をする。

事前準備：外務省ホームページの日米安全保障体制にある、日米安保最近の動きの下にある3つの「2+2」の文書を沖縄関係部分を中心に読んでおいて下さい（すべて理解できないと思いますので、わかる範囲で読んで頂ければ結構です。）。

講座番号13・17

「基地問題を見るもうひとつの視点」

大阪芸術大学放送学科教授（元NHK沖縄支局長）

両親が沖縄の出身、NHK時代に沖縄に勤務経験あり。現在、沖縄戦後放送史を研究中。

東京から見ると南の端にある沖縄は、視点を下げれば、東南アジアと東アジアの接点にあり、各国に等距離の中心点になる。その位置が、沖縄独自の文化の源流を作り、平和な貿易立国・琉球王国を成立させ、また軍事的に沖縄を「太平洋の要石」として注目させてきた。

いま、基地をめぐるアメリカ、日本政府、地元沖縄県の3者の利害相反する中で、沖縄県民が目指しているのは何か。複雑に見える沖縄の基地問題を、もっとも基本に立ち返り、歴史的地理的な視点から捉えていく。社会科学地図帳を各自持参してください。

講座番号14

「沖縄サブカルチャー&カルチャーの裏にみえる歴史」

本校37期卒業。大学卒業後、南の島やリゾートを紹介する出版社で編集。その後大学の広報課に派遣社員として勤務する傍ら、ライター業。主に、沖縄関連、移民など。

沖縄生まれ。宜野湾と那覇に住み、幼稚園へあがる頃から父の仕事の都合で内地を転々と移動。20歳になる頃に両親は沖縄へ戻る。父方の親戚は父以外はみな沖縄に

ずっと住む。大学卒業後就職した編集部でも、何度か仕事として沖縄を取材（雑誌『海と島の旅』編集部）。主にビーチや島、リゾートホテルやダイビングなど。その後フリーのライターとして、東京周辺の沖縄関係のイベントやライブ、沖縄料理屋、雑貨屋、アーティストなどを取材。沖縄の移民のことも興味が有り、在ハワイの沖縄県人会を取材したこともある。

ポーク卵おにぎり（移民）ブラジル料理屋がなぜ沖縄にある？（移民）ヒンブン（中国からの文化）

シーサー（中国からの文化）旧正月の祝い（中国からの文化）チャンプルー（インドネシアからの文化の流れ）三線（戦時中の沖縄県民の心。一方で沖縄出身を隠す。誇りを持たない若者）沖縄タウン（横浜の鶴見や大阪の大正区、名古屋など。集団就職。差別）

わたしがインターネット上に連載した東京周辺の沖縄『merryの東京de沖縄』が見られますので、さらっと興味があるところや自分の家の近くのものを見ておいていただくとなんとなくこんな話かな〜、というのが分かると思います。

講座番号15・20

本校41期卒業、沖縄振興開発金融公庫に勤務。那覇・石垣で勤務。沖縄の持続的な経済発展を目的とした業務を行っており、沖縄に3年間居住していた。

講座番号15「沖縄の観光産業について」

離島県のため、製造業が発展しないといわれる沖縄。そのため沖縄の選んだ道は観光である。沖縄の地理的、歴史的等多角的観点から、いかに観光業が発展し、現在どのような方向に向かっているのかをデータを基に講義する。

講座番号20「石垣島の日常について」

自らの二年間の石垣島生活・勤務を基に、石垣島を含む八重山諸島の概要を講義する。マスコミや観光客の抱くイメージと日常生活との実感を比較しながら、八重山諸島の生活を伝えていきたい。

講座番号16

「沖縄に住んで－文化と言葉の違いを知り合うこと－」

本校24期卒業。養生会理事長本郷診療所所長研修医のときに、沖縄で、すごした。研修医時代に多くの友人を沖縄に得た。

東京の人間が、いかにして、沖縄の人たちに受け入れ

られたか。東京の者が、見た、沖縄での体験。(たのしかったな)(旅行で見ることと、住んで気づくことの違いなど)

講座番号19・24

「ヤンバルの森の生き物たち-小さな鳥々の多様な自然-」

沖縄国際大学総合文化学部教授沖縄国際大学・国際交流センター・所長。特定非営利活動法人やんばる森のトラスト代表

沖縄の自然の魅力と現実の課題等について紹介出来ればと考えています。沖縄には大きな宝が沢山あります。そのような自然の良さを次の世代に残し伝えていくのが私達の責務であり、使命だと考えています。

講座番号21・23

「沖縄の音楽について」

沖縄音楽三線教室主宰。沖縄県石垣島で生まれ育つ。八重山古典音楽安室流保存会・玉代勢長傳氏、琉球古典音楽安富祖流弦声会・照喜名朝一氏に師事、安室流師範免許、安富祖流師匠免許保持者。

1971年 琉球新報社主催「琉球古典音楽コンクール」新人優秀賞受賞。

'83年 沖縄県指定無形文化財八重山古典民謡技能保持者認定

'95年 カーネギーホール「日本の祭 inNY」第1回公演に出演

'04年 国立劇場沖縄こけら落とし公演出演、ユネスコ本部(パリ)公演出演

イ 沖縄音楽の分類について

ロ 沖縄民謡の歌詞について(特に離島)

ハ 三線の理念(三線の教えるもの)、三線に込められた沖縄の願い

について、演奏を交えてお話しします。

講座番号22

「食文化から見える沖縄の風土・歴史そして心」

文部科学省委託事業で沖縄県担当、沖縄タイムス社の入学おめでとう大会専任講師、講演や執筆活動、その他(東京都板橋区立金沢小学校前校長平成15年3月退職)

沖縄県名護市出身・小中高校大学も沖縄です(琉球大学)。現在、沖縄の学習(小学校社会5年生、中・高校の事前学習講師)

ソーミンチャンプルーの実習をしながらの時間を設定してみました。10時45分から14時30分まで連続で・料理体験と講義及び質問など

講座番号25

「沖縄の長寿と食文化」

琉球料理古都首里創業者。500年以前の家系図が残る両親を持つ、純粋な那覇市首里の出身。

食生活の大切さ、長寿で生きるための沖縄のエピソード、おきなわオバァの元気の秘訣についてお話しします。

講座番号26

「沖縄あれこれ」

本校3期生。氷蓄熱空調を専門とします。設備設計および現地施工で沖縄での業務が多い(約15年)。

沖縄での生活。県民性。文化等についてお話しします。

講座番号27

「沖縄異文化体験」

東陶機器に勤務。平成13年(2001年)に沖縄営業所長としてへ赴任。家族(妻、子1名)と共に3年7ヶ月を過ごす。

沖縄の人達の普段の生活や考え、暮らし振り、を実体験に基きご紹介します。仕事やプライベートを通じて「あれっ?」と思うことが多かったこと、非常に参考になったことなどを率直にお話し、是非、皆さんに沖縄ファンになって欲しいと思います。

講座番号28

「沖縄の生活と行事・信仰」

本校相談室カウンセラー(臨床心理士)

沖縄・那覇首里で生まれ育ち、大学進学で本土に出る。両親は沖縄・名護市出身。

まず自己紹介をかねて、沖縄で生まれ育った経験から、沖縄での身近な日々の生活について話し、その後、沖縄独自の行事(旧盆、生命祭など)と信仰(ユタ、火の神など)について話す予定。

< 時間割と受講生数 >

	時間	番	題名	数
6月3日	1限 9:00 ～ 10:30	1	サンゴの海・沖縄の自然を楽しもう!!	8
		3	楽しく学ぶ、おきなわカルチャー	51
		4	ヤマトウヌユーからアメリカユ- (日本と米国占領下の沖縄)	22
	2限 10:45 ～ 12:15	5	ウミガメ保護活動を通じた環境保護活動	8
		6	沖縄の自然・生物と環境問題	8
		7	沖縄の自然と文化(黒島口説きの世界・他)	43
		8	沖縄における米軍基地問題	1
		9	ウミガメ保護活動を通じた環境保護活動	11
	3限 13:00 ～ 14:30	10	ヤマトウヌユ-からアメリカユ- (日本と米国占領下の沖縄)	10
		11	沖縄の自然と文化(黒島口説きの世界・他)	14
		12	沖縄における米軍基地問題	26
	6月24日	1限 9:00 ～ 10:30	13	基地問題を見るもうひとつの視点
14			沖縄サブカルチャ&カルチャーの裏にみえる歴史	2
2			沖縄の謎?(沖縄に行くと感じる疑問あれこれ)	5
15			沖縄の観光産業について	4
2限 10:45 ～ 12:15		16	沖縄に住んで -文化と言葉の違いを知り合うこと-	28
		17	基地問題を見るもうひとつの視点	20
		18	沖縄サブカルチャ&カルチャーの裏にみえる歴史	23
		19	小さな島々の多様な自然	42
		20	石垣島の日常について	35
		21	沖縄の音楽について	33
3限 13:00 ～ 14:30		22	食文化から見える沖縄の風土・歴史 そして心-1-(調理実習)	37
			食文化から見える沖縄の風土・歴史 そして心-2-(講義)	35
	23	沖縄の音楽について	5	
	24	小さな島々の多様な自然	11	
	25	沖縄の長寿と食文化	23	
	26	沖縄あれこれ	5	
	27	不思議の島沖縄～でも大好き沖縄	6	
28	沖縄の生活と行事・信仰	26		

講座を終えて アンケートの結果から

学習旅行から帰った後、全体を振り返る意味でアンケートを行った。「講座沖縄学」に関して、

大変有意義だった22% 有意義だった36% 普通26% あまり有益ではなかった12% 有意義ではなかった4%と、概ね好評であった。有意義だと感じた生徒の感想を読むと、教員側の意図したねらいが達成されていることがわかる。

- ・自分のテーマと関連があった。
- ・実習・実演など体験できた。
- ・様々な観点から考えるきっかけとなった。
- ・話が面白かった。分かりやすかった。実感できた。

しかしながら、一方では反省すべき点もいくつかある。

1. 時期:生徒がテーマを決める以前に行くと効果的だった。

6月に設定したのは、学校行事・部活動の公式試合が少ないためであった。だが、6月は既に決めてある各自のテーマを深化させる時期に当たっており、せっかく面白い話を聞いてもテーマ変更ができない時期であった。

また、土曜日は授業がないために、生徒はこの講座のために登校することになったが、90分の講座のために長い通学時間をかけることに不満を持つ生徒もいた。

2. 1コマ90分は調理等活動を行うのには良かったが、講義では長すぎた。

大学の授業をイメージして1コマ90分の講義は、聞く側にとって、また(大学の先生以外の)講師にとっても、集中力を保つために時間配分等での難しさがあった。他方、三線の演奏や調理実習などでは適切な時間であった。

3. 話の内容の濃さに濃淡があった。
講師選定の難しさと、打ち合わせの重要性を感じた。講師を確保するために、沖縄に何らかの関わりのある人を求めたのだが、沖縄出身の人と沖縄で暮らしたことがある人、沖縄に出張・旅行で行った人との間には差があった。

最後に

これまで林間学校や進路講演会等で、卒業生のお世話になっているが、今後もこのような卒業生・保護者、さらには学芸大学の先生といった人的ネットワークを活用することで、より開かれた広い視点での教育活動がなされるのではないかとこの展望が見えた試みであった。

4. 事前・事後学習の情報機器利用

本節では、学習活動の中から、特にコンピューター端末機器を活用した事例について提示する。

本学習旅行では、現地のフィールドワークを中心に、生徒の活動を設定している。従って、事前指導も、具体的な当日の活動設定の指導も、基本的にはグループごと個別の設定に対応することを要求される。また、学習の総括として課した成果論文では、生徒個々のテーマ設定となるため、さらに細分化した指導を要求される。この状況に効果的な指導方法、活動に対応する方法として、機器を次のような方法で利用した。生徒は各学級に一台の固定端末と、無線 LAN を配した45台のノート型端末が利用可能であり、他に固定端末をクラス生徒全員が同時に活用できる視聴覚室がある。これらを利用した主な活動を時系列で列挙すると、以下の通りである。

活動A：1年次冬季休業課題「沖縄関連文献内容レポート」用紙配布及び提出（教室端末）

活動B：2年次2月課題「個人テーマの研究計画」と春期休業課「個人テーマに即した仮のコース設定」（教室端末）。

活動C：グループコース作成活動。（無線 LAN）

活動D：グループコース設定など、生徒が手書きで記入した資料を PDF ファイル化して保存

活動E：クラス別成果発表会におけるプレゼンテーション（任意利用）。

活動F：学年優秀者発表会におけるプレゼンテーション（任意利用）。

活動G：一斉活動としての論文要旨作成（無線 LAN）

活動H：成果論文（生徒一人あたり A4 用紙10枚程度）の作成と論文収録 CD の作成

①共有ファイルと各教室端末を利用した活動

本校における各教室の端末は、校内 LAN 上に共有ファイルを持っている。この共有ファイルを利用することによって、情報の共有（共通の指示、共通資料の提示）、互いの成果の共有が可能となる。その共有ファイルあるいは各端末に共通のデータを載せることによっておこなった活動のうち、上に示した活動を取り上げると以下ようになる。

活動Aでは、沖縄の基本的な知識を広げるために、自身の興味関心による文献のレポートを一人2冊おこない、レポートにはキーワードを数個示すことを課した。また、活動Bにおいては、個人テーマを深めるために、自分のテーマでのフィールドワークを想

定した仮の日程表を作成した。課題の用紙雛形は教室内の端末、あるいは校内 LAN 上の共有ファイルを利用して配布、個々の USB メモリーにコピーして作業した。課題提出はプリントアウトした用紙以外に、教室内の端末にデータをコピーすることとし、端末データは成果を共有する目的で生徒間の閲覧を可能とした。

②共有ファイルと生徒個々に配布したノートパソコンを無線 LAN で結んだ活動。

活動Gについては、「論文要旨集の作成」という作業である。書式・記入方法に編集上統一した基準が細部にわたり必要であり、各クラスでの一斉作業が有効であった。この作業では、生徒個々にノートパソコンを配布し、無線 LAN によって校内 LAN 上の共有ファイルをダウンロードし、教員の説明とともに論文要旨作成作業をおこなった。作業後は共有ファイルにアップロードすることで提出という方法をおこなった。

③無線 LAN を利用した同時情報収集

活動Cは、各個人の目的に応じた訪問先提案を持ち寄って、最終的にグループとしての訪問先を調整の上作成するという活動に利用したものである。個々の研究テーマに沿ったフィールドワークの活動は、個別専門的な領域の範疇にまたがり、決して市販の旅行ガイドなどでは網羅できない。その中で班員がお互いに情報を共有しながら収集、調整、検討する手段として、45台の無線 LAN を起動し、インターネットなどの情報も含めて利用した。

準備してきた資料の内容をより具体的にし、情報収集の効率と質的向上を実現した。

④ PDF ファイル化による管理と論文集の作成

今回の学習旅行の活動グループ（およそ90班）は学級を超えて編成され、その個別内容に対応した掌握およびアドバイスの検討が非常に困難であった。基本的な活動では所定の用紙に記入する形式の作業も多かったが、それらの記録を PDF ファイル化することにより、学習の推移を含めた管理が、簡素化された。また、成果論文集も学年全体（360人分）を共有するには冊子形式では費用、実用ともに困難な状況であった。そこで一度提出された論文を PDF データとして集約し、CD-ROM に所収することとした。その結果、論文要旨集（一人あたり A5 用紙1枚）に CD を付属

することによって全文を共有することが可能になった。

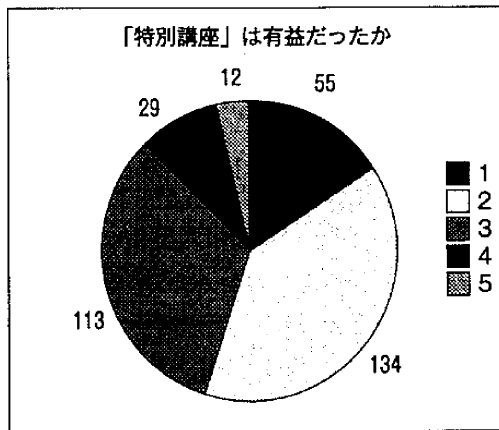
以上の諸活動のように、個別細分化した活動の成果を管理運用する視点のみならず、生徒が互いに共有できる状況から質的な向上を促す点に於いても一定の効果を生み出す点にコンピューター端末の活用の意義が認められるであろう。

5. 生徒アンケートの結果から

学習旅行から帰って来て約2週間が経過した12月1日、学年全体の生徒を対象に、「総合的な学習の時間」および学習旅行全般についてのアンケート調査を行った（表2）。その結果を、幾つかの項目に絞って以下にご紹介する。（グラフの凡例は、全て「1」が肯定的、「5」が否定的意見を示す。）

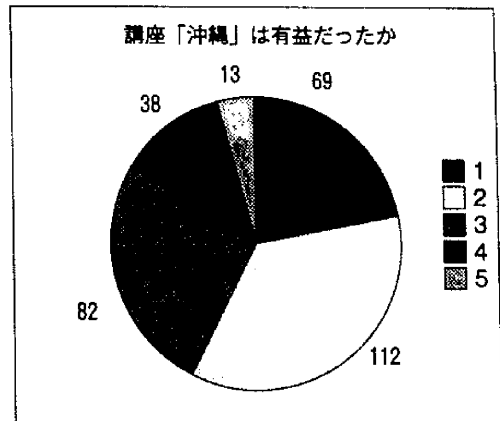
〈「特別講座」「講座沖縄学」について〉

①「特別講座」（本校教諭が行った講座）は、全般的に有益でしたか？



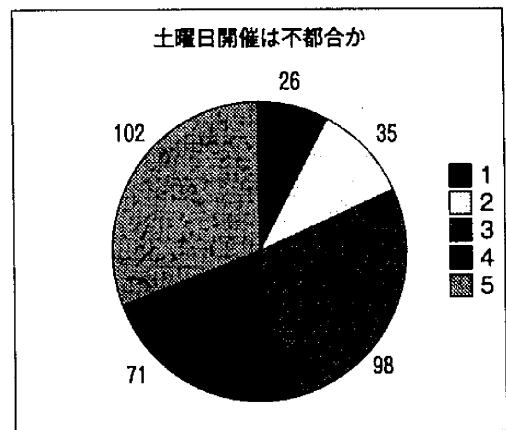
……「大変有益」と答えた者が16%いたものの、「まあ有益」39%、「どちらとも言えない」33%程度の消極的肯定も目立った。「講座によって内容の密度に差があった」「受講者が多すぎて、落ち着いて聴く雰囲気にならなかった」「自分の調べ学習の時間を取らなかった」といった声があった。今後の反省点である。

②「講座沖縄学」（6月の土曜2回に分けて外部講師をお招きした講座）は、全般的に有益でしたか。



……前項の「特別講座」について聞いた質問に比べ、「大変有益」が20%に増えているのが注目される。やはり、沖縄についての専門家のお話は大変糧となるものであったようだ。ただその一方で、「有益ではなかった」とする者も15%に増えている。これは、わざわざ土曜日に「講座沖縄学」の為だけに登校していることから、生徒たちの要求水準が上がっていることも示しているように思う。

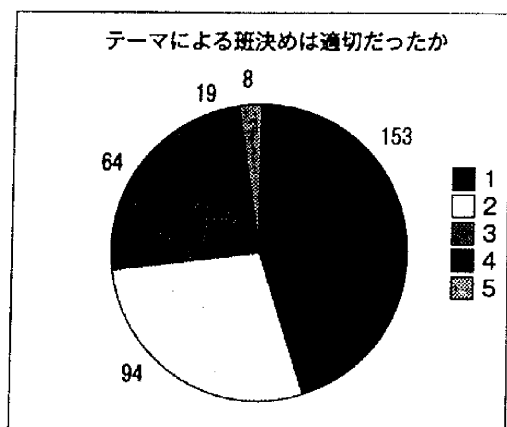
③「講座沖縄学」は土曜日に開講されましたが、これについてどう感じましたか。



……「大変不都合」が30%近くを占め、「やや不都合」も合わせると半数を超えてしまう。2年生の6月はクラブ活動の公式戦が多い時期であり、それとの調整が最も大変だったようだ。また、土曜日に塾を入れている生徒が多いという実情も感じられた。一方で、20%近くの生徒が「土曜日開催は適切だった」と評価しており、「講座沖縄学」のような土曜日活用の可能性を示唆している。

〈学習旅行準備について〉

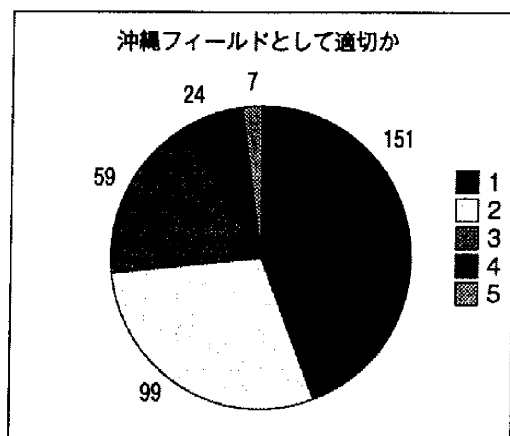
①方面別テーマ別で学習旅行の行動班を決めました。これについてどう思いますか。



……「研究テーマに従って旅行中の行動班を決める」という私たち教員の方針に対して、最終的に、生徒たちが圧倒的な支持を寄せてくれたのは、嬉しい驚きだった。45%が「大変適切だった」と回答し、「適切だった」と合わせると7割を超える。2年生の1学期に実際に班分けをした時には、「クラスの友人と班を組みたい」「これまで話をしたこともなかった人と班を組まねばならない」等の苦情を持ち込んだ生徒たちだったが、実際にフィールドへ行って見て、同じ研究テーマの者同士で行動することの効率の良さを感じたようだ。「テーマ別の班分けにしたことで、学習旅行としての目的意識がはっきりした」という意見があった。

〈沖縄への学習旅行について〉

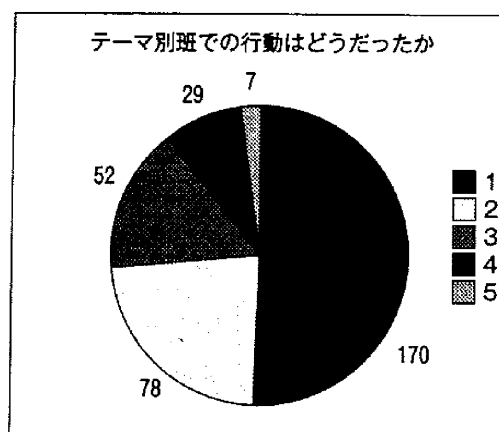
①「沖縄」は、あなたにとって学習旅行のフィールドとして適切でしたか。



……「沖縄」というフィールドに対しても、大変肯

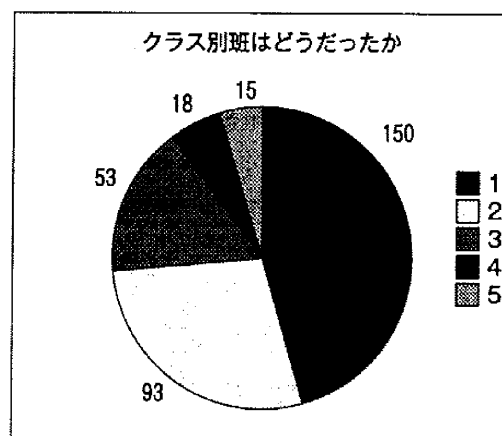
定的である。44%の生徒が「大変適切だった」と答えている。そう考える理由を問うてみたところ、「沖縄は国内でありながら異文化の部分が多く、研究対象としやすかった」という答えが最も多かった。その他、「地元の人たちが温かくかつ開放的だった」「予想以上の自然の豊かさだった」「基地問題、環境問題など、現代日本の直面する課題を顕著に抱えている」というような意見があった。

②1～4日目はフィールドワークから宿泊まですべてテーマ別班で行動しましたが、どう感じましたか。



…昼間の行動だけでなく夜間もテーマ別の行動班で過ごしたことについても、「良かった」という声が圧倒的だった。現地へ行って見て調査やインタビューの計画を練り直さねばならないことも多く、夜間に翌日の行動予定を相談できたことは有益だったようだ。

③4日目の夜からはクラス別の班でしたが、どう感じましたか。

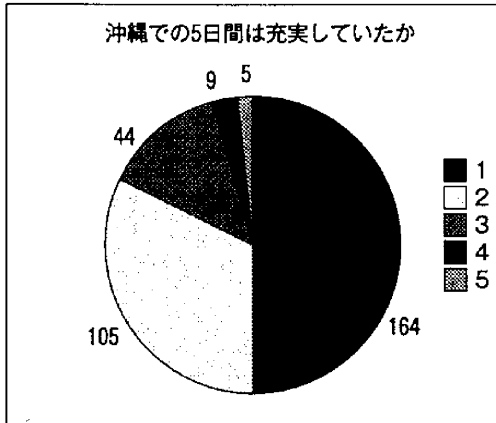


……4日目の夜だけクラス別の班で部屋割りしたの

だが、これについては「みんなで土産話ができて嬉しかった」「最後の晩だけクラスというのはちょうど良かった」というような意見が多かった。一方で、「どうせ2人部屋だったのでメリットは特に感じなかった」というような回答もあった。

旅行自体の運営についての記載は、多くを割愛している。全体行動が少ない旅行、生徒個々の問題意識の差など、様々な課題が存在していることも付しておく。

⑩沖縄の5日間は、一般的に学習旅行として充実していましたか。



……「充実していた」という答えが8割近くにのぼった。「日本に居ながらにして、外国へ行ったようだった」「自由度が高く、やりたいことがやれた」「沖縄の人たちとの触れ合いが印象深い」「友人と、とことん親しくなれた」「美しい自然が印象的だった」などの理由が挙げられている。否定的な意見としては、「お遊びになってしまった感を否めない」や「特に離島においては、大人数での移動に困難があった」「連日ホテルを移動するのは大変だった」等があった。

6. 終わりに

本稿では、学習旅行へ向けての総合の時間を中心とした事前学習と、事後の成果のまとめを中心に論じてきた。今回の学習活動は①地域に関連する基礎的な知識を持った上で、研究活動としてのテーマを設定できる力をどのように育成するか、②自ら掲げた研究課題を追求していくための行動計画を作成する力をどのように育成するか、③それらの成果を、自らの課題に対する理解を構築できるように他者へ表現する力をどのように育成するかという3つの視点を主たる目的としておこなった。ただし、生徒個々の課題意識を優先するが故に、極めて細分化された課題設定、コース設定が生じ、教員のきめ細かな指導が難しくなってしまうという課題も生じた。

また、事前・事後の取り組みを示した本稿においては

〈表 1〉52期「総合的な学習の時間」特別講座時間割 2006. 4. 27

分類	No.	担当	講座名	時間	教室	条件	5月12日	5月19日	6月2日	6月30日	9月15日	9月22日	9月29日
必修	1	松本 至巨	フィールドワークの進め方	1	地理 / 2E		A組 46	E組 41					
	2	藤野 敦	フィールドワークの進め方	1	2B		B組 45						
	3	田中満城子	フィールドワークの進め方	1	2C		C組 45						
	4	若宮 知佐	フィールドワークの進め方	1	2D			D組					
	5	佐久間俊輔	フィールドワークの進め方	1	2F		F組						
	6	古山 良平	フィールドワークの進め方	1	2G		G組						
	7	菅野 晃	フィールドワークの進め方	1	2H			H組					
	8	若宮 知佐	論文の書き方	1	2A / 地理							A組	D組
	9	田中 裕子	論文の書き方	1	2B								B組
	10	田中満城子	論文の書き方	1	2C							C組	
	11	佐久間俊輔	論文の書き方	1	2E / F							E組	F組
	12	古山 良平	論文の書き方	1	2G								G組
	13	菅野 晃	論文の書き方	1	2H								H組
自然	14	浅羽 宏	沖縄の植物と動物	1	生物教		○	○		○			○
	15	小境久美子	沖縄の海の生物	1	生物教				○		○		
	16	小境久美子	沖縄の動植物	1	生物教							○	
	17	田中 義洋	沖縄の自然～地形、地質を中心に	1	地学教				○	○			
自然文化	18	浅羽 宏	草木染めについて	1	生物実						○	○	
	19	坂井 英夫	長生きの秘訣を科学する	1			○	○					○
	20	宮城 政昭	ガラスをとかしてみれば	1	化学実		○	○				○	
	21	宮城 政昭	アンダギー	1	調理室				○	○	○		○
	22	岩藤 英司	紅芋とウコン	1	化学実				○	○			
	23	岩藤 英司	沖縄の自然と飲み物～泡盛など～	1							○		
文化	24	祖慶 良謙	私説「沖縄」概論	1			○	○	○				
	25	祖慶 良謙	沖縄の方言と文化	1								○	○
	26	祖慶 良謙	ウルトラマンと沖縄	1						○	○		
	27	佐久間俊輔	沖縄の方言	2		2回連続		○-----	○	○-----	○		
	28	若宮 知佐	現代文学における沖縄表象	1					○			○	
	29	坂井 英夫	沖縄民謡について	2	音楽室	2回連続			○-----	○			
	30	尾澤 勇	沖縄の工芸について	1	工芸教					○	○		
社会	31	吉野 聡	現代沖縄の政治・経済	1	できるだけ6/30をとること			○		○			
	32	鈴木 孝	アジア海域世界における琉球	3	歴史	3回連続		○-----	○-----	○			
	33	古山 良平	沖縄の基地と環境	2		2回連続					○-----	○	
	34	藤野 敦	万国津梁～琉球王国の繁栄と東アジア	1						○			
	35	藤野 敦	琉球外交～ペリーを手玉にとった男	1			○	○					
	36	藤野 敦	本土復帰と沖縄の悲しみ	1					○				○
	37	藤野 敦	捨て石から要石へ～沖縄戦の位置づけと背景	1		旧1EFG限定					○		
	38	安井 崇	阿波根昌鴻とその時代～伊江島の戦後と反戦地主	1				○				○	
	39	安井 崇	現代日本の写真表現と沖縄	1					○				
	40	安井 崇	沖縄のコラムニスト新城和博と県産本の世界	1							○		
他	41	高崎 朋彦	沖縄の体験学習施設の比較	1	できるだけ5/12をとること			○			○		
	42	高崎 朋彦	沖縄の景観調査のポイント (本島のみ)	1								○	

5 2 期「総合的な学習の時間」についての調査

2006.12.1 5 2 期学年

組 番 氏名 _____

「総合的な学習の時間」の一環としての学習旅行が終わりました。これを一つの節目として、これまで行ってきた「総合」の取り組みについて、あなたの意見や感想をお聞きます。この結果は、5 2 期の今後の「総合」、さらには5 3 期以降に生かしていきたいと思えます。率直に、責任を持って回答してください。

〈1、2 学期の各種講座について〉

- 1-1 「特別講座」(金曜 6 限「総合の時間」に本校の先生方が行った講座)は、全般的に有益でしたか。
- 1-2 「特別講座」の運営全般について感じた問題点があれば書いてください。
- 1-3 あなたが受けた「特別講座」の中で、特に興味深かったものをその理由とともに2つ挙げてください。
- 2-1 「講座沖縄学」(6月の土曜2回に分けて外部講師をお招きした講座)は、全般的に有益でしたか。
- 2-2 「講座沖縄学」は土曜日に開講されましたが、これについてどう感じましたか。
- 2-3 上記で「1」や「2」に○をつけた人は、どのような点で不都合だったかを書いてください。
- 2-4 あなたが受けた「講座沖縄学」の中で、特に興味深かったものをその理由とともに1つ挙げてください。

〈1、2 学期の学習旅行事前学習について〉

- 3-1 方面別テーマ別で学習旅行の行動班を決めましたが、これについてどう思いますか。
- 3-2 上記で「1」や「2」に○をつけた人は、どのような点で不都合だったかを書いてください。
- 3-3 「総合の時間」に何回か行動班ごとにコース検討を行いました。これには意欲的に取り組みましたか。

〈沖縄への学習旅行について〉

- 4-1 「沖縄」は、あなたにとって学習旅行のフィールドとして適切でしたか。
- 4-2 5 2 期は学年全体で「沖縄」という1つのフィールドに行きましたが、これに関して意見があれば書いてください。
- 5-1 1-4 日目はフィールドワークから宿泊まですべてテーマ別班で行動しましたが、どう感じましたか。
- 5-2 4 日目の夜からはクラス別の班でしたが、どう感じましたか。
- 6-1 沖縄での体験学習、インタビュー、調査……etc.の中で、最も有意義だったと思われるものを、3つまで書いてください。
- 7-1 沖縄の5 日間は、全般的に学習旅行として充実していましたか。

☆数字に○をつける、もしくは欄内に記述してください。

1-1 (有益だった) 5-4-3-2-1 (意義が感じられなかった)

1-2

1-3 (裏面を参照して番号で記入する)

2-1 (有益だった) 5-4-3-2-1 (意義が感じられなかった)

2-2 (不都合は感じなかった) 5-4-3-2-1 (不都合だった)

2-3

2-4 (裏面を参照して番号で記入する)

3-1 (適切であった) 5-4-3-3-2-1 (不適切だった)

3-2

3-3 (取り組めた) 5-4-3-2-1 (取り組めなかった)

4-1 (適切だった) 5-4-3-2-1 (不適切だった)

4-2

5-1 (良かった) 5-4-3-2-1 (問題があった)

5-2 (良かった) 5-4-3-2-1 (必要なかった)

6-1

7-1 (充実していた) 5-4-3-2-1 (していなかった)

8-0 学習旅行全般についての感想